

子どもたちとの関わりを出発点とした音楽劇作りについて
～園行事における子どもたちと学生の音の共有を目指して～

佐 藤 倫 子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第51号抜刷）

報告・資料

子どもたちとの関わりを出発点とした音楽劇作りについて ～園行事における子どもたちと学生の音の共有を目指して～

Music play making based on the relation with children:
Sharing sounds with children and students in the nursery school event

佐藤 倫子

はじめに

保育園や幼稚園において、年間を通したほとんどの園行事に、音楽は欠かせない存在となっている。それぞれの季節にあった音楽を行事に取り入れることによって、その行事が活性化するのは言うまでもないだろう。

そのような中で、特に本学学生は実習やボランティアなどで園行事を経験することも多く、また依頼を受けて音楽的なパフォーマンスをすることも多い。しかし、それらのパフォーマンスは、既成の歌や劇・オペレッタ・紙芝居などを学生から子どもたちへと一方的に演じるにとどまっているものが多いことが伺える。この表現者（学生）と鑑賞者（子どもたち）のように表面的・形式的に区別してそこに音楽活動が存在するのではなく（単に音楽が客観的対象として鳴っているという状態ではなく）、鑑賞者であっても、子どもたちの内面的な部分でいつも歌っている歌が響いていたり、音が鳴っていたりすることを通して、より生き生きと音が経験される（音が共有される）活動が必要ではないかと考えるのである。

そこで本稿では、園行事において、子どもたちと学生のそのような「音の共有」を目指した音楽活動の在り方について考案することを目的とし、特に実際の子どもの関わりを出発点とした音楽劇作りについて「児童文化演習」の授業での取り組みを報告する。

1. 「児童文化演習」取り組みの背景（問題の所在）

今日、保育者に必要な音楽的能力の育成に関して、さまざまな取り組みがなされている。その背景には、平成元年に改定された『幼稚園教育要領』において、領域「表現」の登場が契機になっていることがあげられる。それまで「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画制作」の6領域で示されていた保育内容が、改定によって「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域となり、特に「音楽リズム」「絵画制作」が、「表現」という大きな枠組みの中に包括されたことがその特徴である。これによって、子どもの音楽表現や造形表現に関して、その本質を捉えなおす必要があるとともに、音楽関連授業のあり方も問われるようになってきているのである。

それは、これまでのように「音楽」とか「造形」といった限定された領域の中で、子どもの表現の育ちを捉えるのではなく、日常生活の様々な場面に子どもの表現の芽ばえが存在しており、それは決まった領域や枠組みの中で捉えることは難しいという視点である。¹すなわち、音楽表現の育ちを、ある楽曲や歌曲を上手に演奏したり歌唱したりする方向のみに、その保育内容を設定するのではなく、子どもたちの日常生活の遊びや様々な場面における子どもの表現の芽ばえを見つけ、関わり、育てていくような視点が必要であるということである。

そこで、筆者の担当する「児童文化演習」の授業では、前述したような視点を生かして、子どもたちとの

実際の関わりから、子どもの音楽的実態を捉えることを出発点として授業を進めることとした。

2. 授業の概要

本研究では、「児童文化演習」の授業において、本学近隣の保育園でフィールドワークを行い、調査・分析した上で、前述した音楽活動の在り方について考案する方法をとる。

このことは、子どもの音楽的な実態に合った音楽活動を展開できるとともに、子どもと音を共有できる音楽活動を導く上で特に重要な視点になると考える。

○ 平成16年度美作大学短期大学部幼児教育学科「児童文化演習」(佐藤グループ)²について

- 1) 対象 : 美作大学短期大学部幼児教育学科
1年生 23名
- 2) テーマ: 保育園に音探しに行き、それをもとに音楽劇を作ろう! ~子どもたちと共有できる方法を探して~
- 3) 計画 :
 - ① 保育園に出かけ、現在子どもたちの歌っている歌や、興味のある音について調査する。
 - ② 見つけてきた音楽的素材を用いて、音楽劇を作る。

- ③ 作った音楽劇を子どもたちと共有できる方法を考察する。
- ④ 保育園の園行事において発表を行う。
- ⑤ 研究成果のまとめを行う。

4) フィールドワーク:

場所: 岡山県津山市内の A 保育園

調査日: 平成16年5月28日(金), 6月11日(金)

行事参加日: 平成16年12月21日(火)

「12月のお誕生日会」

3. 授業実践内容及び考察

前述したように、この授業は、本学幼児教育学科第1学年対象で、通年(30回)にわたって行われるものである。筆者の担当するグループの授業実践内容は、以下の表1のとおりである。

限られた授業時間の中で、作詞・作曲、台本作りなどすべてを行う音楽劇作りは困難を要するため、今回は、「ドラムジカ」³に近い音楽劇作りの方法を用いた。「ドラムジカ」とは、オペレッタでもミュージカルでも劇でもなく、お気に入りの歌や授業で歌った歌、友達と一緒に歌いたい歌などを選曲し、「歌」と「歌」の間をナレーションやセリフでつなぎ、物語を進めていく音楽劇であり⁴、従来のオペレッタやミュージカルに比べて、手軽に授業や保育の中で取り組むことができるからである。

表1 平成16年度「児童文化演習」佐藤グループ 授業実践内容について

第1回	オリエンテーション	授業内容の説明と活動計画について相談した。
第2回	保育園における音楽調査依頼文書作成 サウンドマップ作りの練習	保育園・幼稚園における音楽調査に関する依頼書類を作成。また、協力園における音楽調査で必要となるサウンドマップ作りの練習として、学内における音環境を調査しサウンドマップ作りを行った。
第3回	学内のサウンドマップに基づく音作り	第2回目に作成したサウンドマップをもとに、実際に聞いてきた学内に存在する音を、何かを用いて表現してみることを試みた。(←音楽作りの基礎ステップとして)
第4回	協力園 第1回音楽調査	保育園でのフィールドワーク 午睡後~降園までの自由遊びの時間を利用し、子どもたちとの関わりの中で、子どもの歌っている歌、興味のある音、園の音環境などを調査し、記録した。

第5回	第1回音楽調査のまとめと課題	前回の記録をもとに第1回フィールドメモを作成。また、調査した内容を報告しあい、調査における今後の課題についても話し合った。
第6回	協力園 第2回音楽調査	保育園でのフィールドワーク (第4回と同じ)
第7回	第2回音楽調査のまとめ	前回の記録をもとに第2回フィールドメモを作成。また、調査した内容を報告。
第8回	第1回、第2回で収集した内容のまとめ	第1回、第2回のフィールドメモをもとに、調査・収集した内容を以下の3つの視点からまとめを行った。 子どもの歌っていた歌、興味を持っていた音、園の音環境
第9回 ┆ 第11回	音楽劇作りに向けて	保育園での調査内容をもとに、どのような音楽劇を作っていくか、とくに「ドラムジカ」の形式で作成するにあたって、どのような曲を用いるか、どのようなテーマのストーリーにするか、その方向性を相談した。
第12回 ┆ 第15回	ストーリーの考案	おおまかなテーマをもとに、小グループに分かれて具体的なストーリーの考案。
第16回 ┆ 第17回	ストーリーの決定と台本作り	各グループまた個人で考案したストーリーを発表し合う。 そして、ストーリーの決定。 台本係の決定と、台本作り。
第18回	台本の発表と配役	台本係の作成した台本の発表と配役
第19回 ┆ 第26回	効果音の考案 練習及び小道具・大道具の作成	役者は、セリフ・演技の練習 音楽係は、効果音の考案及び伴奏の練習 小道具・大道具係は、道具の作成
第27回	リハーサル	学内音楽室においてリハーサル
第28回 ┆ 第29回	発表準備及び発表	保育園において発表準備及び発表
第30回	授業のまとめ	発表後の感想、レポート作成

1) 保育園での音楽調査より

はじめに述べたように、本授業の取り組みでは、協力園に2回訪問し、実際の子どもたちとの関わりの中から、音楽調査を行った。そのフィールドメモの項目は、以下のとおりである。

- ① A 保育園のサウンドマップを書こう
- ② 子どもから出てきた音・音楽的素材を書こう(どんな歌を口ずさんでいたか、どんな音に興味を持っていたか、など)

①のサウンドマップについては、A 保育園内の設備などの配置図を書きながら、置いてあった楽器や時計、CD ラジカセなどを記し、また、そこからどんな音が聞こえていたかについても図と言葉を用いて記すようにした。

学生の書いたサウンドマップの特徴としては、園庭にあるカメを飼っている大きな(池のような)水槽が示され、そこから聞こえてくる水の音を記している学生が多かったことがあげられる。このことから、単に音楽的素材を、楽器や CD ラジカセといった音楽に直接関連しているものとして捉えていたのではなく、日常の生活音や自然の音をも音楽的素材と捉え、それら

に、学生が気づいているということが言える。

②の子どもから出てきた音・音素材については、子どもが実際に歌っていた歌については全部で20曲以上示された。また、興味を持っていた音については、園庭にある遊具を子どもたちが叩いていた音や砂場遊びの時の砂の音などの記述もあり、ここでも音楽に直接関連していない音にも、学生は気づくことができていたと言える。

このような子どもたちの周りに存在する音を、すべて音楽的素材として読み取る視点は、保育園での調査前に、練習として行った学内での音環境の調査とサウンドマップ作りが生かされているのではないかと考える。特に、調査にあたっては、そこにいるだけで聞こえてくる音をできるだけ詳しく書いてくるように指示したことも、影響していると考えられる。

2) 音楽劇作りの過程より

この音楽劇創作にあたっては、保育園における音楽調査の内容をもとに、ストーリーを考案していった点が、最大の特徴である。特に、「ドラムジカ」の形式をとるため、どのような歌を取り入れて作るかが、ストーリーに大きく作用することから、何度も使用曲について話し合う時間をとった。また、この授業の研究テーマでもある「子どもたちと音の共有を目指した音楽活動」を行うためには、音楽調査によって得られた情報を最大限に用いなければならない。つまり、多くの子どもたちが口ずさんでいた曲（多くの学生の記録にあった歌曲）をできる限り多く用いることによって、子どもたちとの音の共有がより浸透するという点で、選曲には困難を要したと思われる。

しかし、話し合いが進む中で、少しずつストーリーの方向性が見え、使用曲が決まり、ストーリーが決まり、台本ができ、効果音が考えられていった。音楽劇の概要は表2に示したとおりであるが、この音楽劇の内容面で特徴的だったのは、登場人物についてである。

主人公の子ども4人は、調査に行ったA保育園の子どもとして設定された。これは、学生がA保育園の子どもの立場にたって演じることにより、子どもた

ちと気持ちを共有するという点に焦点があてられたためと言えよう。それは同時に、子どもたち自身も、自分が劇の中に入って実際に体験しているような感覚を、より持てるようにする意味があったと考えられる。

また、七人の島の子が登場人物に設定された理由は、音楽調査によって得られた曲目に、「アブラハムの7人の子」が多く含まれていたことがあげられる。つまり、この音楽劇に「アブラハムの7人の子」の曲を用いるためには、その「7人の子」が必要だったのである。

そして、もう一つはカメ（海がめになっているが）が設定されていることがあげられる。これは、1)の「保育園の音楽調査より」でも述べたように、学生のサウンドマップには、園庭の水槽にいるカメの存在、そこから聞こえる水の音の記述が多かったことから、登場人物としてカメを用いたと考えられよう。これにより、生活の中のモノ（カメ）と音（水槽の水の音）が、この音楽劇により再表現され、子どもたちの日常生活の中に存在するモノが、音という素材と結びついて子どもたちと学生によって共有されることが目指されたのである。

このように、音楽劇作りの過程では、保育園における音楽調査の内容をなるべく多く反映させる形で進められたことがわかるだろう。それは特に、子どもの歌っていた歌での共有、登場人物をその園に存在するモノに関連付けることによって起こる共有、日常生活の音との関連によって起こる共有といったように、音楽劇による総合的な音の共有が、目指されたのである。

表2 音楽劇の概要

タイトル	「世界に一つだけの花」
登場人物	主人公 : 子ども1, 子ども2 子ども3, 子ども4 七人の島の子: 島の子1, 島の子2 島の子3, 島の子4 島の子5, 島の子6 島の子7 海がめ君, クジラ君 ナレーター サンタさん

スタッフ	音楽 大道具・小道具 台本
使用曲	「さんぽ」 「線路は続くよどこまでも」 「うみ」 「ひょっこりひょうたん島」 「アブラハムの7人の子」 「世界に一つだけの花」
ストーリー	子どもたちが、サンタさんにプレゼントをしようと、世界に一つだけの花を探して探検にでる。クジラ、海がめに出会い助けられながら、島にたどり着き、7人の島の子と出会い、世界にひとつだけの花を見つける。そして、最後にその花をサンタさんにプレゼントし、サンタさんは大喜び。そのお礼に、サンタさんは魔法でその花を増やし、A 保育園の子どもたち全員にプレゼントする。

3) 学生による授業実践レポートを通して

最後の授業のときに、まとめとして学生にレポートを課した。これにより、1年間の「児童文化演習」を学生自身が振り返る機会を持つとともに、それぞれの学生がその時々の過程でどのように考え取り組んできたか、またどのような考え方や力が身に付いたか、筆者自身の授業評価として、今後の授業や演習につなげることができる考えたからである。

特に、この授業の主たる目的である以下の2点について、それらに関する記述を、学生のレポートより読み取ることを試みた。

- ① 「子どもたちとの実際の関わり」の中で学生は何を感じ学び取ったか
- ② 子どもたちの前で演じた際に「音の共有」がなされたかどうか

以下は、学生のレポートの記述例である。

①に関する内容

- ・保育園にいろんな音を探しに行くことから始まったの

ですが、普段気にしなければ気づかない何気ない子どもの使う言葉、口ずさむ歌を見つけることができました。

- ・今まで、気にしたことがない音も、注意して聞くとたくさん見つかりました。
- ・子どもと触れ合うことで、子どもたちが好きな音楽や遊びを知ることによって、劇をするとき、子どもたちに楽しんでもらえるように多くのことをメモした。
- ・子どもたちから好きな曲や興味を持っている音、何気なく口にする曲が聞けるかどうか不安な気持ちもありました。しかし、いつの間にか普通に話したり遊んだりしていると、子どもたちが自然とある曲を歌っていました。普通にお互いが楽しく接していると、歌も自然と出てくるので、とても楽しい雰囲気の中で音楽(音)調査をすることができたと思います。
- ・…(略)…大きく分けて、2種類の音を発見しました。1つ目は、雨の降る音、小鳥の泣く声など、自然が出す音です。風で木の葉がこすれる音、どこかで鳴く鳥の声など、人工的にはうまく奏でることのできない美しい音をいくつも発見しました。2つ目は、音楽です。
- ・…(略)…手遊びや童謡の他にも、テレビアニメの主題歌など子どもたちの周りには沢山の音楽が溢れているようでした。
- ・今までやったことのある劇とは少し違い、自然や普段の生活の中に存在する音、リズム、動きを重視し、音の使い分けや新しい動作を盛り込み、工夫した劇になったと思います。
- ・A 保育園で子どもたちの行動を観察していると、たくさんの音や言葉、歌を耳にすることができました。例えば、走るときになるスリッパの音、そうめんをすする音、昼食の前や紙芝居の前に歌う歌など、いつも何気なく聞いている音がとてもおもしろく聞こえてきました。
- ・ただの言葉がけよりも、言葉がけに歌が入っていて、子どもたちは、身近に音楽に親しめるので、いいと思いました。
- ・保育園で見つけた音をもとに、サウンドマップを作成しました。図に表すことにより、意外な場所からおも

しろい音が出ていたことがわかったり、同じ空間の中でも、特に静かな場所があれば、にぎやかな場所があるという発見がありました。

②に関する内容

- ・子どもたちが私たちの音楽劇を見て、笑顔になってくれたり、楽しそうな表情になったりしているのを見ると、自分まで笑顔になったり、明るい気持ちになりました。
- ・最後に「世界の一つだけの花」を配ったとき、みんなうれしそうに両手で花を持ち、自然に歌に合わせて体を左右に振ってくれる子どもを見て、すごくうれしくて感動したし、歌で子どもたちと関われたと思いました。
- ・最初は、劇を見てもらうと思っていたけど、劇が始まると全く違いました。子どもたちが知っている曲は、一緒に口ずさんで歌ってくれました。
- ・舞台裏から練習通り大きな声で歌っていると、子どもたちの歌声や喜ぶ声が聞こえてきて、とてもうれしく、取材（音楽調査）した甲斐があったなああと心から思いました。
- ・子どもたちが知っている歌を入れていたので、わかりやすくよかったとつくづく思いました。

以上のように、学生のレポートからは、子どもたちとの実際の関わりを通して、普段無意識のうちに聞いている子どもの何気ない言葉や口ずさむ歌を見つけとる力が、学生に身につけていることを読み取ることができた。

また、園行事で発表された結果としての音楽劇によって、その場で子どもたちと学生との音の共有が、どれだけ深く生き生きとなされたかどうかは、学生のレポートから判断することは難しいことがわかった。しかし、演じている間に子どもたちが一緒に歌を歌ったり、喜ぶ笑顔や声が学生まで届き、それにより学生の表現も生き生きしてきたという点では、そこに存在していた音楽活動は、相互に共有されていたと言ってよいと考えられる。

4. まとめ及び今後の課題

この実践の全体を通して考えられるのは、まず第一に、実際に子どもたちとの関わりの中でフィールドワークを行なうことで、学生が、子どもの遊びの様相や音の発見をしていく経験ができたこと、また、保育園の音環境についても意識化が図れたことがあげられる。

そして、音楽劇作りの過程においては、フィールドワークをしていたことによって、実際に演じる際の子どもたちの様子を想像できたこと、また、子どもたちとの音の共有について、実際の日常生活に存在する歌や音から考え、音楽劇作りに反映させることができた点は、この授業実践での主たる教育的意義としてあげられるだろう。

このように、日常的に何気なく存在しているモノや音が、音楽劇の中で再表現されることによって、それらを意識化し再認識するような経験を通して、今後子どもたちが、日常生活の中で、様々な音をより敏感に感じ取ることができるようになるという点でも、教育的意義があるのではないかと考えている。

しかし一方で、次の課題も残っている。それは、音楽劇作りにあたって、子どもたちが知っている歌についてはある程度取り入れることができたにもかかわらず、もっと日常的な音そのものについては、なかなか劇に取り入れることは難しかったという点である。これによって、最終的に目指した子どもたちと学生との音の共有も、歌という側面に限定されていたように感じており、さらに深い「音の共有」をどうするか、課題として残っている。

また、子どもたちは、あの音楽劇によって何を感じとってくれたのか、音楽劇の後の子どもたちの感想についても調査できなかった点を、今後の課題としておきたい。

《謝辞》

本研究及び授業実践を行うにあたり、音楽調査のフィールドワーク及び園行事参加にご理解・ご協力くださいました岡山県津山市内のA保育園の先生方に、感謝申し上げます。

注および引用文献

- ¹ このような子どもの表現に関する視点は、以下の文献に詳しい。
今川恭子・宇佐美明子・志民一成 編著 (2005). 『子どもの表現を見る, 育てる～音楽と造形の視点から～』 文化書房博文社
- ² この「児童文化演習」の授業は、幼児教育学科第1学年の通年の授業であるが、平成16年度は、1学年を4グループに分けて、4人の担当教員がそれぞれ1グループを担当した。授業内容は、各担当教員の専門によって異なっている。
- ³ 伊藤嘉子 編著 (2000). 『子どもとつくる劇遊び「ドラムジカ」』 音楽之友者を参照されたい
- ⁴ 上掲書3, p.2

(2005年12月1日 受理)